グラープマンとジルソン

高田三郎

戰時戰後における中世哲學の研究情況を概觀せよといふ編輯部の註文であつたが、現在がまだその時期でないことはいふまでもない。過去十年間がこの研究領域に於ても世界的には決して成果に乏しいものでなかつたことはボヘンスキー教授編纂の "Bibliographische Einführungen in das Studium der Philosophie" herausgegeben von I. M. Bochenski (A. Francke Ag. Verlag, Bern) といふ小册子シーリズに含まれた Philosophie des Mittelalters (第十七册、一九五〇年、F. van Steenberghen 編)、Patristische Philosophie (第十八册、一九五〇年、O. Perler 編)、Augustinus (第十册、一九四八年、M. F. Sciacca 編)、Thomas von Aquin (第十三—四合册、一九五〇年、P. Wyser 編) 等の關係諸册について見ただけでもすでに明かであるし、更に哲學に關する各國の文獻雜誌例へば Bibliographie de la philosophie (Institut international de Philosophie. Depuis 1937. Directeur: Raymond Bayer), Philosophic Abstracts (Russell F. Moore, New York. Editor: Ralph B. Winn), Philosophischer Literaturanzeiger (Verlag der Schriftleitung, Schledorf am Kochelsee/Obb. Seit 1949) 等のバックナンバーが入手されればかゝる事態は一層切實に示されるであらう。他方、關係著作の舶載は最近漸くかなり活潑になつて來たといふ段階に過ぎず、編輯者の要望に沿ひうる日はまだ相當遠いと見なくてはなるまい。筆者はこゝでは、中世哲學研究の領域における近年の二つの事件、グラープマン教授の逝去とジルソン教授のアカデミー會員任命とを取り上げこの機會に兩教授の業蹟を要約的に紹介することによつて責をふさぐこととした。あたかも前者については L. Otto: Martin Grabmann zum Gedächtnis. Eichstätt, 1949; L. Otto: Martin Grabmann und die Forschung der mittelalterlichen Philosophie. (Philosophisches Jahrbuch 59. Bd., 2. Heft. Fulda, 1949) があり、後者に關しては中世哲學史家がフランス翰林院に初めて席を占めたといふ劃期的な出來事を記念して Etienne Gilson. Philosophie de la chrétienté. Par J. Maritain etc. ("Rencontres" 30. Les Éditions du Cerf, Paris, 1949) が編まれてゐる。筆者はこれらに資料を仰ぎつゝ特に最近の十年に重點をおいて兩教授の業蹟を以下略述することとしたい。

× × ×

ミュンヘン大學名譽教授（教義學）マルティン・グラープマンは一昨年一月九日アイヒシュテットの自宅で七十餘歲の生涯を閉ぢた (1875-1949)。最後まで充實して行はれた彼の異常に精力的な五十年の學的活動が學界に贈つた著書論文は大小三百有餘の多數にのぼり異色ある彼の研究の成果を語つてゐる。若干のものは邦譯によつて我國にも廣く知られるに至つてゐるが、西洋中世の精神史といふ久しく未開拓に放置されてゐた研

究領域の過去一世紀間の開發の歴史に光彩を放つ彼の名は Ignaz Jeiler, Heinrich Denifle, Franz Ehrle, Clemens Baeumker 等の先達や Maurice de Wulf, Étienne Gilsón 等の名とともに永く記憶されるに相違ない。

グラープマンの目標はスコラ哲學と神學の歴史的探究にあり、彼の研究はスコラの源泉としての教父時代をも含めて、單に或る時代・人物・學派に限局されずその全般にわたつてゐる。哲學のみについて見ても彼の偉業は既にユーバーヴェク・ガイヤの哲學史を一見して明かであらう。しかも更にその後二十二年間の勞作が之に加はるのである。彼は學習時代アイヒシュテットからローマへ送られ此の地で當時何れもヴァティカンの史料・圖書に關係する位置にあつた Heinrich Denifle ならびに Franz Ehrle から決定的な影響を受けた。この二人の卓越した先驅者の許において彼はスコラ哲學・神學に關する未刊行著作の研究の緊急な必要性を學ぶとともに寫本研究の基本的訓練を獲得したのである。その後はミュンヘンの圖書館を根城に彼の歴史的研究は各所に埋沒された未刊行の關係著作を渉獵發見し之に史料を求めつゝ行はれてゆく。如何なる立言も史料の廣汎な探索とその嚴密な檢討の裏附けなしにはなされないといふ實證的史家の態度が中世精神史の場合においては特に彼におけるごとき忍耐強い寫本研究を要求し來つたのであり彼はまたかゝる仕事に好適の素質を有したのであるが（ミュンヘン大學神學部がナチスによつて閉鎖された後にあつても攻擊の危險が身邊に迫るに至るまで彼がミュンヘンに釘附けされたのもこの

必要のためであつた）、然し史料の探求と整備は要するに必要な基礎工事たるに過ぎない。彼の野心を導き彼を終始鼓舞したところのものは、中世の精神的相貌とそのなほ今日に生きる精神的據條の闡明といふことにほかならなかつた。彼の所信はギリシア哲學、特にアリストテレス的なかたちにおけるそれとキリスト教的啓示の眞理がスコラにおいて――最も模範的な仕方ではトマス・アクィナスにおいて――調和的な結合を見たとなすところの、彼の墓前に餞けされた言葉に從へば最も『西洋的な』人間のそれである。彼の淡々として一見無味乾燥な寫本研究においてもその末端にまでこの所信が血脈となつて流れてゐることが見らるべきであらう。

グラープマンの勞作についてはオット教授によつてなされたごとく四領域に分つて語られることが便宜であらう。

㈠　彼の學的活動の初期においては多く、スコラの教説に從つての理性と信仰、哲學と神學の問題が關心の對象となり、處女出版も思辨神學すなはち後世の所謂自然神學の本性に關するトマスの教説に關するものであつた。夙にスコラ的方法の淵源からその成熟に至る歴史を編むことによつてスコラの方法の眞の姿と意義を闡明する計畫が意圖され、全三卷に豫定された大著『スコラ的方法の歴史』の第一・二卷は順調に出版された。(Geschichte der scholastischen Methode, nach der gedruckten und ungedruckten Quellen dargestellt. Freiburg i. Br. 1909, 1911.) 第一卷は遡つて教父時代の淵叢に筆を起して・アンセルムスにおけるスコラ的方法の形成に及び、第二卷はそ

の後の發展を辿つて盛期スコラの直前に至る主として十二世紀を對象とする。さらに第三卷は十三世紀の盛期スコラにおけるトマスならびにその同時代人を取扱ひこゝにスコラ的方法の完成を見ようとするものであつた。第一卷の領域においては概ね印刷されたテキストに據りえたが第二卷では未刊行の手寫本に資料を仰がざるをえないことが多く、その目的によつて行はれた手寫本の探索、特にミュンヘン圖書館におけるそれは多くの未知の著作を浮び上らせる結果となつた。そして例へばランのアンセルム、アベラール、サン・ヴィクトルのユーゴー、ギヨーム・ド・ラ・ポレ等に關する認識は之によつて著しく進展を見たのである。だが第三卷の領域に入つて後は、之に必要な豫備的な仕事、中でも十三世紀初めのアリストテレス復興に關する困難な問題が研究の進行を停頓せしめ、遂には原計畫は拋棄されるに近かつた。一九四三年ミュンヘンを離れてアイヒシュテトに移つて後、彼は第三卷に代るものとして、舊い手稿の整理に基く前後二部から成る著作を企てた。トマスの『ボエティウス De trinitate 註釋』に關する研究――この小著作の體系的歴史的註解といふかたちをとつた――がそれであり、その第一部は一九四八年公刊されてゐる。(瑞西フライブルク。)こゝでは神學の學的性格についてのトマスの見解が主題であり、トマスの小著作にあらはれたこの主題に關する教説がトマスの他の著作における全關係箇所を顧慮しつゝ組織的に敍述された後、更に同時代ならびに後代のスコラ諸家の所論(その源泉は大部分グラープマン自ら蒐集した手寫本である)との比較においてスコラ的思惟の全歴史のうちに位置づけられてゐる。第二部においては哲學的諸學の學的性格についてのトマスの見解が――その意味で彼の Wissenschaftslehre が――トマスの同じ著作の最後の二つの quaestiones の部分を對象に同樣の仕方で取扱はれるはずであつたがこれは遂に完成を見なかつた。前後二部を併せて、スコラ的思惟の多彩性とその中におけるトマスの獨自の位置を明かにしようとする意圖を、特殊な問題限定の下にトマスの一著作の註解といふ謙虛な形によりつゝ遂行せむとしたものにほかならない。かくてこの書は書かれずに終つた『スコラ的方法の歴史』第三卷に代るトルソとして遺された。

(二) グラープマンの著作のうちトマスに關係を有するものは頗る多く、彼の最初の著作も最後の著作もトマスの名を掲げるものであつた。トマス哲學の簡潔にして卓越した敍述として既に邦譯もされてゐる Thomas von Aquin, eine Einführung in seine Persönlichkeit und Gedankenwelt (" Sammlung Kösel " 7. neu bearbeitete Auflage. München-Kempten, 1946) があるほか、更に簡短なものが新しく Görres-Bibliothek (Nr. 12) の一書として刊行されてゐる―― Die Philosophie des hl. Thomas von Aquin (Nürnberg, 1946)。特殊領域の面からトマスを取扱ふものとしてはこれも邦譯の與へられてゐる Die Kulturphilosophie des hl. Thomas von Aquin (Augsburg, 1925) のほかにも Das Seelenleben des hl. Thomas (Freiburg, Schweiz. 3. Aufl. 1949), Die Lehre des hl.

Thomas von Aquin über die Kirche (Regensburg, 1903) 等がある。トマスの主著『神學スンマ』への入門書として珠玉の小篇 Eine Einführung in die Summa Theologiae des hl. Thomas von Aquin (Freiburg i. Br. 2. Aufl. 1923) の存することも周知に屬するであらう。

トマス研究の標準的著作に屬する彼の勞作 Die Werke des hl. Thomas von Aquin, eine literarhistorische Untersuchung und Einführung (2. Aufl. Münster, 1931) はもとヤンドネとの論爭のために書かれた Die Schriften des hl. Thomas von Aquin (Münster, 1920) から論爭的性格を除いて生れた包括的なトマス著作研究の書であり、こゝでは傳承のトマスの著作の眞僞性の問題のみならず著作の年代順といふ困難な問題が直面されてゐる。生前グラープマンは最近二十年間に近い研究成果を含む新しい增補版の準備を完了してゐたが、Historisches Jahrbuch (1940) に發表された Die Autographie von Werken des hl. Thomas をも收めたものが、歿後に至つて出版された。(Die Werke des hl. Thomas von Aquin. Eine literarhistorische Untersuchung und Einführung. 3. stark erweiterte Auflage. Münster, 1949) この版は "Die Beiträge zur Geschichte der Philosophie und Theologie des Mittelalters" ―― 一九二四年クレメンス・ボイムカーの歿後グラープマンが出版の責に任じてゐた叢書――の第二十二卷第一―二册として刊行された。かなり久しく中斷されてゐたこの著名な叢書はこれによつて再興の軌道に乘つたわけである。

トマスの中世ならびに近世における傳承と影響も彼の注目するところ。かくて特にトミストが彼の研究の對象となつたのも當然であらう。けだしこれらの人々に關する研究はトマス自身の教說の吟味の上にも有用な役割を果すからである。かゝる仕事は然しながら中世に關するかぎり刊行資料に依ることができず徹底的な寫本研究も必要とするものであり、グラープマンの學才に好適な題材となつた。これらの研究は兩卷の論策集 Mittelalterliches Geistesleben (München, 1936, 1936) に收められてその重要な部分を形成してをり、其後書かれたものは遺志に基いて刊行の豫定される同書第三卷に收錄が豫定されてゐる。

(三) 中世アリストテリスムに關はる著作・論文も約五十にのぼり、哲學史的に重要な意義を有する諸研究を含んでゐる。中世におけるアリストテレスのラテン譯の傳承と新しい譯の生誕、ならびにそれに伴ふアリストテレス受容の問題は十三世紀初頭を境としてその前と後とでは著しく相貌を異にするが、グラープマンはこれら兩期を通じてこの困難な問題領域の開拓に多大の基本的な貢獻をなしたのであり、殊に論理學について顯著な業績を擧げてゐる。すでに彼は『スコラ的方法の歷史』第二卷において十二世紀のスコラに所謂 logica nova (オルガノン後半) が知られるに至つたことの重要な意義を强調しその到達の徑路を問題として取上げてゐる。晚年同じ問題は更に研究の成熟と問題の幅を加へて重要な研究題目を形成した。一九四八年瑞西フライブルクで行はれた「第十二世紀におけるアリス

トテレス』に關する講演はその報告を內容とするもの。この研究はトロントの中世研究所の "Mediaeval Studies" の一卷として出版されるはづといふ。戰後ローマにおいてイタリア語でモエルベケ Guillaume de Moerbeke に關する研究論文も出版された(一九四六年)。さきに Union Académique Internationale によつて企てられた "Aristoteles latinus" の大叢書はこれらグラープンの研究によつて好箇の準備的工作を獲得したといふべきであらう。(この叢書の第一卷は一九三九年に刊行されたとオット教授はいふが筆者は未だ見る機會をえない。)

だが中世アリストテリスムの全歷史に關する綜合的成果は遂に出るに到らず、それが主として十三世紀の含む困難に由來したことはさきに觸れたごとくであるが、彼の貴重な勞作は必要な基礎工事に向けられてゐる。彼は例へばアベラールからペトルス・ヒスパヌス(十1277)の時代に至るアリストテレス論理學の作用力を測定するための基礎資料として多數の歸證法の教科書・提要書、アリストテレス・ポルフィリウス・ボエティウスの論理學書の注釋の類を手寫本から蒐集し、その重要なものを刊行しまたそれらの作者に關する研究を公けにしてゐる。(Die Sophismataliteratur des 12. und 13. Jahrh. mit Textausgabe eines Sophisma des Boetius von Dacien. Münster, 1940 のごときは同じ問題聯關に屬する。) また十三世紀のアリストテリスムの一形態たるラテン・アヴェロイスムスについても Siger de Brabant の手に成る一連のアリストテレス注釋を證示、Boetius de Dacia の二論文を發見刊行、またパリ大學文學部のエティカ諸註釋を吟味してそのアヴェロイスト的傾向を檢出したほか、ボロニア大學のアヴェロイストに關する研究をも行つてゐる。他方正統的キリスト教的アリストテリスムについてはその創始者たるアルベルツス・マグヌスの深甚な影響力にグラープマンは特別の注意を喚起してゐる。トマスのアリストテリスムスは各所に論及されてゐるが、"Theologie und Glaube" ならびに 'La Ciencia Tomista" (いづれも一九四四年) 誌上の論文に於て一應總括的に概觀された。アルベルツス＝トマス的アリストテリスムに屬する人々を扱つた個別研究としては比較的新しいものに Gentile da Cingoli, italienischer Aristoteleserklärer aus der Zeit Dantes. Münster, 1941; Die Aristoteleskommentare des Heinrich von Brüssel und der Einfluss Alberts des Grossen auf die mittelalterliche Aristoteleserklärung, Münster, 1941 等がある。同じ一九四一年には Die mittelalterliche Kommentare zur Politik des Aristoteles (Münster) も刊行された。

(四) 中世を貫いてアリストテリスムス以上に長い時期にわたる影響力を持つたプラトニスムス・ネオプラトニスムスに關してもグラープマンは少からぬ勞作を割いてゐる。すでに『スコラ的方法の歷史』第二卷に於て十二世紀のプラトニスムスの本據シャルトルとその主要な代表者をかなり綿密に取扱ひ、更にそれを補つて重要な代表者ギョーム・ド・コンシュに關するモノグラフィー (Handschriftliche Forschungen und Mitteilungen zum Schrifttum des Wilhelm von Conches und zu

Bearbeitungen seiner wissenschaftlichen Werke. München, 1935) を書いた。後者の研究はプラトンの『ティマイオス』篇の中世への影響についての關心を浮び上がらせ、かくしてグラープマンはスコラにおける『ティマイオス』諸註釋に關する獨立の論文を企畫したが惜しくもこれは執筆に至らなかつた。シャルトルの Guilelmus の名を冠する Microcosmographia といふ自然科學的論文の校訂本は、書かれずに終つた序說を缺いたまゝトロントで刊行される。

アルベルツスに發する獨逸スコラのネオプラトニスムス的潮流も彼の關心の對象となつてをり、スコラ的ネオプラトニスムの源泉たるプロクロスや僞ディオニュシオス書も彼の研究から逸せられてゐない。

フランシスカンの諸哲學者特に十四世紀以後のそれは殆ど完全に彼の研究の埒外にある。これは前述のごとき彼の研究の性格と徑路からみて當然の制約ともいふべきであらう。

概觀的な初學者向きの手堅い『中世哲學史』が "Sammlung Göschen" の一書として世に送られてゐる（一九二一）。更に詳細な通史を "Philosophische Handbibliothek" のために約束してゐたがこれは遂に果しえないで終つた。

グラープマンの著作總目錄は『中世精神生活』の第三卷に掲げられることが豫告されてゐる。

（未完）

執筆者紹介

武市健人　神戸大學文理學部（哲學）教授　文學博士

金子榮一　東京女子大學文學部（社會學）講師

高田三郎　東京都大學文學部（西洋哲學史）教授